

『奪った果てに、何があるかなんて』（男女2名）

素舞台にハイチェア2脚。ラウンジの設定。各場面の転換Mはテイクファイブ。

登場人物…

誠治 … 30代男性。会社員。

香織 … 30代女性。会社員。誠治とは大学の同級生。

誠治が舞台端で電話をしている。

誠治「水ですか？ ま夏来るとある程度仕方ないですよ……。写真撮って送ってもらってください。異常ではなく、普通というか、いや、よくあることなんですけどね。冷やしすぎです……。はい。すいませんが。よろしくお願いします」

香織入場。椅子に腰かける。

香織「忙しそう」

誠治「たまたまだよ。夜はかかって来ない」

香織「久しぶり、かな」

誠治「そこそこ。なかなか大学の皆とは会えてないな。誰か会った？」

香織「……。あんまり」

誠治「最近みな子と連絡とった？」

香織「……。うん、一か月くらい前に」

誠治「どうだった？」

香織「どうって？」

誠治「俺のこと何か言ってたかなって。仲いいからさ？」

香織「仲いいというか。懐かれてる、かな」

誠治「懐く、ね。同じ年なのにな」

香織「そこがかわいいんじゃないの。順調？」

誠治「まあ」

香織「かわいいよね。頭いいのに天然っぽくて。心配？」

誠治「天然か？」

香織「ぽいってだけ。しっかりしているよ。ただ何考えてんのか分かんないけど」

誠治「ね」

間。

誠治「香織、彼氏は？」

香織「いない」

誠治「意外だな。モテるのに」

香織「そう？ 社内はむずかしいよ。年上と既婚者ばかり」

誠治「な。先輩皆結婚して、家建ててる」

香織「うん。この人もパパなんだって思ったり」

誠治「そうそう」

香織「そろそろ？」

誠治「いや」

誠治スマホを差し出し、香織は画面をのぞき込む。

香織「ああ」

誠治「口ではな、ごめんとしか言わないんだ」

間。

誠治「どう思う？ 誰かいるのかな？」

香織「・・・」

間。

香織「ねえ、誠治君。愛を分解すると、好き、セックスしたい、結婚したい、子供がほしい、私は大きくこの四つだと思うの」

誠治「うん？」

香織「でも、それぞれは独立した感情、らしいの」

誠治「理解できないな」

香織「そう？」

間。

香織「付き合っていない女に欲情しない？」

誠治「それは」

香織「でね、社会がその四つを一体でないと愛と認めない、そう縛っていると思うの」

誠治「社会ね」

香織「結婚したい？」

誠治「みな子と？」

香織「みな子ちゃんは・・・ね。そうじゃなくて、誠治君が誰かと」

誠治「いつかはな」

香織「子供は」

誠治「ほしい」

香織「そうなんだ。みな子ちゃんど？」

誠治「それこそ、みな子の問題だろ。結婚しないのに子供？ありえないだろ」

香織「そう？」

間。

香織「ねえ、私とセックスできる？」

誠治「は？」

香織「イエスカノーで」

誠治「・・・イエス」

香織「私もイエス」

誠治「え、まじか」

香織「私は、結婚したいし、子供もほしい」

誠治「誰と」

香織「誰かと」

間。

香織「誠治君となら結婚も子供も考えられる。セックスもできる」

誠治「香織？」

香織「好きになると思う」

誠治「今、そんなこと言うなよ」

香織「誠治君は？私をどう見る？」

誠治「いや」

香織「打算的でいいんだけど」

誠治「打算的。まあ抑えられない下心はあるよ」

香織「ふーん」

誠治「ふーん、じゃねえよ。さっきイエスって言ったから」

間。

香織「みな子ちゃんの相手知りたい？」

誠治「やっぱ、知ってんのか」

香織「まあ。ね、どんな人なら許せる？」

誠治「許す？ 許せないよ」

香織「許せないんだ……。相手を？ みな子ちゃんを？」

誠治「・・・」

香織「自分を？」

誠治「そうだな。全部かな」

香織「私なら相手かな」

誠治「まずはな」

香織「でも、自分って言えるのいいよね」

誠治「言ってみただけだよ」

間。

香織「・・・私」

誠治「は？」

香織「私。みな子ちゃんの相手」

誠治「いや」

香織「女性が好きなのかもって」

誠治「いや待て。意味分かんない」

香織「最後にシたのいつ？」

誠治「みな子と？」

香織「何？ みな子ちゃん以外があるの？」

間。

香織「みな子ちゃん以外とシた？」

誠治「その前に」

香織「答えないのって、イエスの意味じゃない？」

誠治「仕方ないだろ！」

香織「みな子ちゃんに断られるから？」

誠治「・・・」

香織「誰でもいいの？」

誠治「そんなことはない！」

香織「一月くらいでしょ？」

誠治「・・・」

香織「一月も待てないの？」

誠治「仕方ないだろ。男なんだから」

香織「せめて好きだからっていいなよ。好きだからシたいのに、って」

誠治「棚に上げるなよ。お前のしたことだって」

香織「お前、ね」

誠治「ごめん」

香織「ううん。こっちこそ」

間。

香織「嫌なこと頼まれるから、嫌なんだって」

誠治「・・・。そんな話したのかよ」

香織「好きならできるだろ、って、それが嫌だって」

誠治「なら！俺にそう言えいいだろ！」

香織「言ったら諦める？そこに不満があるのかもって、わだかまりになるでしょ」

誠治「俺が楽しむためだけだ。誰にも見せない」

香織「そういう問題じゃない」

誠治「何だよ」

香織「フェアじゃない」

誠治「何が？俺だって写ってんだ」

香織「意味が違う。なんていうのかな」

誠治「・・・」

香織「ああいう子には、なんていうか」

誠治「ああいう子ね。香織は？」

香織「何？私で楽しめるの？」

誠治「・・・ああ。当然」

間。

香織「彼女、誠治君の浮気知らないと思うよ」

誠治「・・・」

香織「興味ないんでしょうね」

誠治「そんなわけない」

間。

誠治「どうだった？」

香織「みな子ちゃんど？」

誠治「ああ」

香織「知ってる通りじゃない？」

誠治「そうかな。男と女じゃ違うだろ」

香織「そう思う？」

誠治「うん。違う？」

香織「男じゃないから分かんない」

誠治「何だよそれ」

香織「どう話せばいいの？」

誠治「どうって・・・」

香織「何が聞きたいの？」

誠治「何・・・が」

間。

香織「『私かわいい？』って」

誠治「は？」

香織「意外だよな。そんなこと聞かない子だと思ってた。

何て言うのかな、自分にも興味ない、そんなイメージだったから」

誠治「聞かれたことないな」

香織「言ってあげてた？」

誠治「・・・」

香織「言ってあげれば。というか思ってるなら口に出るでしょ」

誠治「思ってたよ」

香織「言わないと伝わらないよね」

間。スマホを見る。

誠治「『結婚する気はない。少し違うかな。誠治君じゃないって』。それこそ言わなきゃ分かんねえよ」

香織「今更って思う？」

誠治「思うね」

香織「気づかなかった？」

誠治「何とも言えないな」

間。

誠治「なあ。かわいい？ になんて答えたの」

香織「え、かわいいよって」

誠治「そっか」

間。

誠治「涼しい顔してんな。女同士はノーカンとでも言うの？」

香織「言わないよ。少なくともみな子ちゃんは浮気だと自覚してるし」

間。

誠治「香織が好き、なのかな」

香織「どうかな。でも私は彼女を選ばないから」

誠治「なら、なんでノったんだよ」

香織「ほしかった」

誠治「何が？」

香織「何が、だろうね。何が、だと思う？」

間。

香織「学歴が同じ、社会的信用も変わらない、見た目も同レベル。でしょ？
でも、なんていうのかな、恵まれている、っていうのかな」

間。

香織「彼女、高島君と付き合ってたでしょ？ イケメン御曹司」

誠治「・・・」

香織「まぶしくなかった？ お似合いだし」

誠治「別になんとも」

香織「気に入らなかった、私」

誠治「そうなんだ」

香織「何が違うんだろ。なんで私は必死にならないと何も手に入らないのに、彼女は待っているだけでなんでも手に入るんだろ。そう考えるの」

誠治「高島もそうだった」

香織「うらやましいね」

誠治「別に。・・・顔も家柄もあいつの努力じゃない」

香織「でも、そこにひかれる人は多いよ」

誠治「香織も？」

香織「私は全然」

誠治「香織は、男に何を求める？」

香織「求める、だなんて、そこまでの女じゃない」

誠治「そんなことない」

香織笑う。間。

香織「誠治君は？何を求めるの？」

誠治「分かんない」

香織「みな子ちゃんの何にひかれたの？」

誠治「いい子だよ。俺にはもったいない」

香織「答えになってない、かな」

誠治「あんな子が彼女だったらな、って」

香織「言うことなんでも聞いてくれそうって？」

誠治「そうじゃない。守ってみたいな、色んなこと教えてあげたいなって」

香織「あー男子がよく言ってた。彼女が高島君と付き合ってた時期、特に」

誠治「でもな、行動に移したやつはいない」

香織「奪えてよかったね」

誠治「奪ったなんていうなよ。あいつがつまんなそうにしてたから、色々誘っただけで、結果俺を選んだ、それだけ」

香織「あの時の誠治君必死だったよね。かっこよく見せようって努力してた」

誠治「やめろよ」

香織「今誘っても、遊びで終わるなって思った」

誠治「は？」

香織「かっこよかった。当たり前だよ。かっこつけてたんだから」

誠治「小難しくいうなよ」

香織「何がほしかったんだろ。誠治君に選ばれた女、なのかな」

誠治「俺が好きだったの？いつから」

香織「調子に乗らないで」

誠治「なんだよ」

二人笑う。間。

香織「もう大人でしょ。気持ちだけじゃ進めないでしょ」

誠治「だから？」

香織「現実を見たら？」

誠治「小難しくいうなよ」

香織「女が誘っちゃみつともない？ でも」

誠治「でも？」

香織「言ってほしい」

誠治「何を？」

香織「何でもいいよ。セックスしたい、結婚したい、子供がほしい、好き」

誠治「そうだな。・・・セックスしたい」

香織「最低」

誠治「強引なセックスは嫌？」

香織「は？」

誠治「俺を満足させろって日があっちゃダメ？」

香織「好きと引き換えにできるなら、ダメじゃないよ」

間。

誠治「やっぱり俺が好きなんだ」

香織「・・・」

誠治「認める？ それとも体がほしいだけ？」

香織「・・・」

誠治「沈黙はイエスだ」

誠治笑う。

誠治「俺、撮るよ」

香織「撮るって？」

誠治「(カメラを構えるポーズで) だから撮る、だ」

香織「・・・私を最後にしてくれるなら」

誠治「なるほどね」

間。

誠治「プラザの3015」

香織「プラザホテル？」

誠治「そう。取ってて」

香織「30階？」

誠治「・・・そう」

香織「そう。プラザって・・・」

誠治「そうだ。俺昇格したんだ」

香織「え？」

誠治「渡しとく。いらない？」

香織「・・・いる」

誠治名刺を渡す。（※名刺の裏に504）

誠治「捨てんなよ」

香織「捨てないよ。すごいと思う」

誠治「うん。意外？ あ、そういえば」

香織「ん？」

誠治「香織は学生のおかげから、誠治君は出世するって言ってたなーって」

香織「え。それは、そうでしょ？」

誠治「そうだったのかも」

間。誠治退場。香織はずっと名刺を見ている。

香織「プラザは30階もないでしょ」

名刺裏に本当の部屋番号を発見する。

香織「504」

暗転。